

主体的な実践を通して

ぐんま教育のつどい
群馬県高等学校教職員組合

教育を考える



～ぐんま教育のつどい2023開催～

2月11日（土）群馬県労働福祉センターにて「主体的な実践を通して教育を考える」をメインテーマに群馬高教組主催の「ぐんま教育のつどい2023」が開催されました。

最初に水田副執行委員長から、群馬高教組の紹介と現在の活動及びこれまでの「ぐんま教育のつどい」の経緯を含めた挨拶と日程説明がありました。そして、生徒の主体的な活動内容やその成果にスポットを当て、生徒を中心とした学校作りを広く紹介することを今回のテーマ設定の理由としたことが紹介されました。

レポート

吉澤 勉（勢多農林高校教諭）

*第一部 伊勢崎商業高校

先輩の活動を追った作品上映



第一部は、伊勢崎商業高校の理科研究班／放送愛好会からの発表です。発表は、放送愛好会の「向山先輩の放課後」というドキュメント作品の上映から始まりました。これは、今年度のNHK杯全国高校放送コンテスト群馬県大会のテレビドキュメント部門で最優秀賞を受賞。その後のNHK杯全国コンテストでは準決勝まで残った作品です。内容は、理科研究班に所属する向山先輩の姿を通して、「地衣類（苔）の研究」とその研究を基にした「ビジネスへの提案」を映像で追いながら、この提案が「群馬イノベーションアワード（GIA）2021」で大賞を獲得するまでのドキュメンタリーです。撮影から編集、ナレーションまでの作業を、放送愛好会唯一の部員である岩下明寛さん（3年生）が1人で行いました。また、今回

の発表でも岩下さんが説明をしてくれました。

コケの可能性を探るうちに…

理科研究班は、3年前に地衣類が好きな向山太陽さん（当時2年生）が理科担当の宇津木由紀子先生を巻き込んで個人的にはじめた活動が発端です。翌年、偶然にも地衣類が好きな新入生の並里璃王さんが加わったことにより本格的な活動が始まりました。校内のコケを採集して分類し、性質を調べる活動を続けているうちに、コケが消臭効果・空気の浄化効果を持っていることを見出します。そこで、これを利用した商品開発を思い立ち、約100の商品から「コケで作った靴」の製作を選び出します。

企業・大学に直接アタック

ここからの具体的な活動として、大手繊維メーカーへ自ら連絡をし、製品開発についてのやり取りを行います。メーカーからは、繊維にするため



にコケに含まれるある成分の除去が必要、との指摘を受けます。そのため、コケを研究する大学へ連絡を取り、その成分の除去について相談をします。その結果、「理論上はコケから繊維を作り出し、靴を作り出すことは可能である」との結論に至ります。

GIA2021で最高賞の栄誉！

以上のことを、起業家発掘プロジェクト「群馬イノベーションアワード2021」で向山さんと並里さんが発表し、大学生や一般企業を含めた500組を越える応募者の中から選ばれた18組によるファイナルステージ(2021年12月実施)において、見事最高賞である大賞を獲得しました。

発表では「1年以内に製品化をする」と宣言しましたが、資金的な問題がありまだ実現はしていません。



コケの研究は後輩に継承

現在、理科学研究班は「コケ玉発電」についての研究を行っており、そのことについての紹介もありました。最適な土壌を見つけるところから始まり、直列と並列の電圧/電流の測定、持続性についてなど様々な研究の様子が発表されました。現在、「コケ玉発電」については大学と連携して継

③コケ玉発電の研究



続中です。

この発表については、主体的な活動が中心であるものの、学校の先生、企業の方、大学の研究者の方などの協力によって成し遂げられたものと言えます。しかし、周囲からの事前指導があったわけではなく、あくまで自主的に先生への協力を求めたり企業や大学へ生徒自らが連絡を取ったりという活動のサポート体制を、自分たちで作りに上げています。高校生の活動力の強さを認識させられた発表でした。

好きなことをするには…

発表後の質疑応答では、参加者から「部活化やクラウドファンディング等は考えなかったのか?」という質問に、並里さんは「好きなことをやっているだけなので、部活になると制約が大きくなる。クラウドファンディングは責任が生じ、好きなことができなくなるので考えていない」と答えました。

また、「教員からのサポートについては何がありましたか?」の質問に対しては、「教頭先生が朝7時から夜10時まで校舎を開けて研究できる場を作ってくれたことに感謝しています」とのことでした。

放送研究会も理科学研究班も学校の公式な部活動ではなく、好きな生徒が主体的に集まって行っている活動です。ちなみに放送研究会は1人、理科学研究班は5人で現在活動をしているそうです。

*第二部 伊勢崎清明高校

社会と校則のギャップに疑問！ ～生徒会総局の取組～

第二部前半は、伊勢崎清明高校生徒会の校則改正に関する経過と実践について、生徒会総局担当教諭の千明俊太先生による質問に生徒会総局のメンバーが答える形で発表しました。主に卒業生が実際に関わったので、卒業生3人の発言が中心となる校則改正についての報告となりました。

改正への活動当時の生徒会長だった高柳伊吹さんから、活動を始めるにあたっての状況などについて説明がありました。

改正点の一つ目は、「(髪型の)ツーブロックを認めること」です。社会情勢は変化してきてい

るのに学校の規則が変わらない、髪型についての禁止理由が曖昧・不透明であることに不満があったということです。二つ目は、「雨天時の体操服での登校を認めること」です。この二点に関して、生徒総会において全国的なデータや県知事の発言を基に発言をしました。生徒総会と同時に発信した SNS では好反応もありましたが、総会以降に校内での大きな動きにはなりませんでした。



再提案においてプレゼン準備

自分たちの進路が決まった後に、再度生徒総会において行動を起こすことにしました。前回反応がなかった原因として、データ不足があると考え、全国や県内の校則について調べ、グーグルフォームを使って全校生徒へアンケートを実施し、それらをまとめたプレゼンテーションを行うためのスライド作成をしました。その中にはメリットやデメリット、想定される質問や反論に対する答えや新たな基準案も盛り込みました。先生方へプレゼンテーションを計画し、はじめに校長先生に対して行い、その後、他の先生方に対しても机上へ案内を配布した上でプレゼンテーションを実施しました。

職員会議では賛否あるも…

プレゼンテーション実施後の職員会議において校則改正についての提案がされ、議論の末条件付きで二つの件については「試行段階とする」となったということです。（ここで千明先生からの補足発言として、生徒には言っていなかったが、職員会議では賛成反対それぞれの意見があったが、「生徒がこれだけやったのだから認めていこう」という推進の意見があり、その結果として条件付きで認める方向となったとのこと。）

言葉だけでなく行動すること

これまでの活動を通して得た感想として「新たなことを行う、または、今までのことを変えていくためには言葉だけでなく行動が大切であるということ学んだ」という高柳さんの発言がありました。また、「現在の生徒会においても、細部まで考え、必要なものを揃え、その上で呼びかけ、自らが先頭となって動かないといけない、大変だけれどもやりがいと責任を強く感じている」との発言も、現在の生徒会総局のメンバーからありました。



自らを表現するために ～リベラルアーツ同好会設立～

第二部後半では、伊勢崎清明高校のリベラルアーツ同好会のメンバー柏倉逸希さんと斉藤北斗さん（共に一年生）からの発表がありました。

まず、柏倉さんから今までの経緯が語られました。高校入学後に最初に入部した部活動は、ルールが厳しく自分のやりたいことと大きくかけ離れていたため、途中で退部したとのこと。その時、ある先生が自分のやりたいこと、自分を表現することが大切である、と言っていたことを思い出し、生徒主体でやりたいことをやりたい人が集まる部を作ろうと考えたそうです。同じようなことを思っていた人が近くにいたこともあり、一緒に生徒会と事前協議を始めました。新しいことを始めるには、自らの考えを話すことで自分を表



模擬裁判の様子

現したり活動したりしていかないといけないし、そのことで賛同する仲間を集める必要があることが分かったようです。

リベラルアーツ同好会としての活動は、SDGs についての講演会の実施、弁護士を招いての模擬裁判、書き損じハガキ収集、投扇興、などを行っています。実施に至る準備や日程調整、講師の依頼等は全て生徒が行っているそうです。

自分で考えることの大切さ

同好会で学んだこととして、人とのつながりが大切であること、それまでは周囲の意見などをそのまま信じていたが改めて自分で考えるようになったこと、自分の進路を考えるきっかけとなったこと、などが発言されました。

また、学校に対して、生徒の個性を大事にする場、生徒が正しいと判断できる場、探究できる場、興味や生き方への学びができる場、いろいろな人との交流ができる場であって欲しいという要望・希望も示されました。

発表後の協議の時間に、「伊勢崎清明高校にはもともと生徒が主体的に活動する気風があったのか。」という質問に対して、「3代前の生徒会顧問からそのような雰囲気ができていた」との回答がありました。そのような環境の中で、今回の発表のような生徒自らの活動ができるようになったことは、豊かな土壌に植物が芽を出し大きく成長していく姿を想起させます。

取材を終えて～若者の主体的な学びを支えるもの～

年度末の新聞紙上では、あちこちの学校で開かれた「課題研究発表会」や「探究型学習成果発表会」の話題が溢れています。これも、昨春の高校一年生から導入された新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」に則った「探究学習」による動きと捉えることができそうです。文科省による新機軸のために起こる教育現場の動揺や混乱の中で、これらの「探究学習」のすべてが本来の意図とはかけ離れた「紋切り型」に墮しているとは言わないまでも、生徒・教員共に「やらされ感」が伴うルーティン・ワークとなってしまっている危険性があります。

そのような風潮の中で、伊勢崎商業高校と伊勢崎清明高校の皆さんの活動に共通するのは、自分たちがしたいことをするための覚悟と気力にあふれていることでした。自分たちの好きなことをやり遂げるためには、次々に降りかかる困難はむしろ彼らの活動を活発にしているようにも思えます。大人に指示されてすることや他の人から頼まれてすることなどでは、決してこうはならないでしょう。制約を受けないために部活化を拒む伊商の理科研究班や、生徒主体でやりたいことをやるために集まった伊勢崎清明のリベラルアーツ同好会による活動は、お仕着せの枠を超越し、真に「主体的」であり「対話的」であり「深い学び」を彼らにもたらしています。

《取材：倉林順一 加藤彰男 大山仁》

「権利(Right)」は「正しい(right)」

第一部及び第二部の発表が終わり、群馬高教組の春山副執行委員長から閉会の挨拶として、「権利」とは「right」であることが示すように、「権利とは正しいこと」であり「権利を得るための活動は正しいこと」であると共に、「人が動けば変わっていくということ」を再認識できた有意義な集会だったことが語られ、全ての日程が終了しました。

集会後に参加者から、「本来、学校は生徒が自分のやりたいことを見つける場であることを思い出させてもらった。もっと学校という場を深く考えていきたい。」「高校生の行動力に驚かされた。また、活動が続いていくことに心強さを感じた。」「学校の役割の一つとして、自分の言葉を安心して語ることができる場、いろいろが経験できる場であることを感じた。」「教員は生徒の様々な力を見つけ、伸ばしていくことを喜びとしてほしい。」などの感想が書面で寄せられました。(了)

